四書義式

二

遠
1.453
2

遠門
1453
2
巻

柏

四方養草巻之二

林氏の宗義を屈服

帰の言たりけれ共つゝ事にのりとやえん弘もるとく
但海の説り真之宗門のあふ仮ちる人都
ふ林信也と明ん以上のり思術ゝ姉をゆるり
かつゝ偽を常陸坊ふりけたりとふ忍義のこ
とゞも多りりさ者ふ人に對して思術ゝ者と
きゝ実とさげるよるをみゝ夜法燈の下
に鈍と至安斗をる八者之の言ゝ外より思
ぶ者ハ内わりゝて何ふ使まり内ゝ守る者

八月朔日に成て夏うすく建具張うつし
小菊て作渦よ坐敷まるもはしを近所なく
物に除んく不見とも夏あり人近て立ち
こそと伝る流く公とゆと福しとさしゆ
小ゆ田右馬佐として新田流の名跡者
ゆ里如とかうり足下の御名をゆくゆと
見れ福うくバ我茅屋へ見ひうんやしとあ
く此人作世話すたあくハ緒ふはうまうん
ち青已ら右馬に一振の紐と赤ん足下見び
ゆくゆあのもちゆ〜ざるゆ長とゆ〜ゆん

ゆ物のゆくゆん八ら一法小伝矢体くゆりんを
宮む母田八安よゆり門戸ちびし国一口の
紐と帥の袋よ裏年のよ小御園夜ゆ
敵を帝流物ゆと八方よ焼ゆ方小物ゆ子
とうけ已八れくよりゆ香飛して物ゆ更の
ゆゆ子宮ち行小見ゆまハゆやと火
就を流ちを松ゆ振よくゆ字せバ衣を被ちて
静よあゆゆ事ある者あゆを一陽させんと像小
金くる竹の鞭ち揚ゆバ新と流く濁ら
右を撃ハ右ゆ撃ハ右ゆ撃ハ右ゆ撃ハ右ゆ

因ふかくて眷とかくめくたくと乎ふあ
まくて高ふ意して働る能くうんまて落枝
かづくくうる葉人飛るりたもくてあるく免
他人ハ教ふ化せ於のまふ於くとやと独を
云して鶏鳴ゆ乃ぶ門と叩く者あり誰で
とうんまて林住世るり此夜宝剣ゆるる
一礼ふまるると云光國呵く大笑してたるむ
きるる云て此爲於たくるきより竹世思ひ沼
以者る虎術もおのまづ熟感ふ知るく人
緒ハ一対の真るり我滅留ふ儒るのく体

世ハ実ふ宝剣ハ此夜於ゆくり見んのくとたづさ
へ来る代ゆくり云出ると絵へかくるさ光國ゆ青
に帰しく宝代ゆるふいぬらして刀掛よ変くる
袋云出しく云くけばゆくるよんゆくる体世の美濃
たり光國天と作ゆく驚くさ思ま思ゆ奇術ゆ
ひねぐおのまづ記も知るのを知らば云驚くまて全
のと言毫しく体しいよく聞く変り乃我
号ゆふ云よ横山家の五月て板杉の逸風なふ者
体世とあさみく彼人行乗神よ及ぐんまづ試ん
とんハ一夜林ゆ宅へものびいつく寝ゆとんを

バ屋敷の隅ホ一茎の桃史照し中央ヘ紙帖詩
く外逸風指と揮く何へども書かし板ぬくして
倩うる奥旨捺ふまと掛まゞ紙帖の内ち所み
ぐう横ヘ拂ふ実先稲素のごく板杓八方新
とんく経ふ孤逸バ刀と内へ引く紙帖の内所
書も考えるく云人流のごく板杓再び見板し
武人の思術挑うけくも乃ゞび為まのこと紙ホ
林ゞ門ヘ入く号ふ光国と称ヘ一属んゞ術奥に
函まるを極秘の敵と云ふ体也為謂ヘ逆ふく
突せゞ素の孝女なる者の中ゝて同ヘ体也云

さゝゞ光国逸風なる女士伝授とうゝ屬ひヘ
甲ひなし光国ハ名思外智世ホ考ゝた思乃に
逆し伝く無なのみあゝゞ乃ゝく死と浩へ
逸風ハ服ヘヘ神氣あやゝく天性思の文乃と見
に伝んゝ云ゞも朋友の情ゞんゝと為ゝふ
逆て素の云更ハ人の伝思術を一茎の技藝か
ア秘まゝひの体を学と拘ゝ賢素るゝば
ほんゞ伝義と云んゝを欲ゞ光国板持
と拘さヘせ為云ゝと志のまゝ変てゝう一点の
不伝ホし思乃の法別ホ一士伝授の技ゞ乃今

紅田三小伝らえ板打ちて後ちも美ものまこと繁び
のうで伝授の変ひもう破きんことをんつよ忠術
暗むふ見ちいと奥義の伝書を出して史伝へ授
迄ぬおのまこ再び忠術行ふまして天ふ授ちて紅田
板打ち義と全終ふ法しく帝代の術と授ちる
と廻じ変と称ちく生死と絶ふせんと変ふそれ
挑園小義と絶んぞるこ繁よ恥ぞちら体色の書の
関ちるへ至毎におさく者ら忠をめん

不破万作絶情ち張

翰雲至誇の拾ひ絶ふ小邦を悔と人

より起ちと流道の事と暗ふ大師よ下ちもおち
し真宗関白久絶ちの老ふ破万作を客張
艶麗まちと好ぐ者ちくんち人絶まどちあを
ちちちを殿下挑しの居鍵ちち内裏系内の
度毎よ不破付なしちを頃ちち地の拾
い中ちか忠武士感義かん絶ひ源者の河ふ出
ふ破のちち系よ拾ちあちん神ふく式れをちる変
度ちちちを万作ち絶ふいぶうちをひ板ちの
ちち等用絶拾ち作と拾ち概も絶ね変ふさを
し頃ちちくの話あちいの拾也絶ちと

見あるべき法なく仲の人と再こに人と寄
と有しうば暮うく手まうく上洛の付持し他の武
士服を付まく洛るに人洛をふるもひ幼稚
に源茅の奥うるこの清ふいぶせく草結んさ
る家ふ人出ふう業内して客ふ對侍しけま
ば彼侍ふひうるは京ことうさうは神を舎人し
うまとして推く問しうば実もたまうる主の作うと
問と神よたくうるべうしけと仰をうけをまん
おのまと西ふ立花南よ結る尾敢何集ま手者
ううるべ去年私用にく洛陽へ向うし主作る

御ひと殿下の行啓と殿下せ人せしふ計しびそまの
殿とう人初まうくうう勢の間も方まがさく
至ま人と云使もうるべく夜ふ義ふ人ね主
のあるべうみふく世あての知りるあん殿
とを伝るべうう人海で しさを主人の眺をこに
主の夢日月をまを作るうしううかと
やをけ張と問侍ふ源こ海ふ不破り
義さまばうをも知ふを遂ふを情の作ふ
こそし流石あまと伝しく情し他
と考まうてさ知る問侍ふ清うふ問瀬うべ

あるを見て平野ふかき将有んと思ふ事なれば勢田の
橋うち渡りて粉と雪出ぬと云ども形くの御将のこ
と宮ぬ出給はすせ不破も関ふ解ゝ渡給
し映ふ乃び還給の時鏡板いくゝ石ゝ土手のか
る橋かうく練むかの移ての如なるまゝ後ゆく兵
云とう勢田なる反橋をくゝ切ば尾形ハ蒙うゞ
ふくく探ケふ立源吾うに向ゝかくゝうむひ
いしゝ海中なる時あゝせけ也敵ハ海鏡しゝ
後ゝ鏡光の石破るまゝ云ゝも放ちぬいぐ
上田を水正ふ御くゝ万代のうまゝていゝあん

ふくく余まゝの渡云を蔵う清水ようゝうして
くゝ勢田の橋うゝ切ほゞふ煙しゝ蘭者行の
蓋うしなる武者ハ知ふ知ふ人なるゝ乃ゝて
まゝ渡ゝ敵ゝ殺ゝの従者ゝ行次ゝ新ゝ兵ゝ語
蓋うふゝくゝ橋ふ切かる横ゝのかげふ人の
ふくくゝ乃ゝ水正敵ゝ橋輝くゝうふゝて
に渡うゝ不破氏なるゝ上田を水正ゝ云ゝ
ふくくゝ中なるゝしゝいふもゝあゝんくゝうかに
云の清前ハ志のまゝ清ゝ中はゝんくゝなるゝと
迎くゝ去万代ハ尾形ゝ向くゝ長下の志ゝの

徐々ようやく仮寝の夢を結ぶ。今八月の出家
をいとわん中々かゝる人なのまことに
くさ〳〵詠歌あい〳〵と下の紀氏とあり。石山に詠る
尾歌八洞ほらの紅葉の重なる。今八
浦〳〵海のせんと横雲ハ小倉山に流む遠ゝとる琵琶の湖
ゆゝしき光と水底に沈む。
八洲〳〵ふ細まる猶毋漕つ。祢ゆゝ敷ふ白真
遠ふ舞史焼づけ〳〵紫しまる元ふ元義
や尾歌の戸数志賀の浦まぐ流まゝよる浦人
多中に見る蓮ゝとるゝ。細いまて引と

ゝんまゝば年はゝる男の白綾の大振袖忘たるで
いゝゝと振〳〵ふいひとゝくゝ。此話不破ハ
ゆゝ〳〵傾ゝ〳〵ふ間病とゝく寄ふ元則と
元ゝ忘ゝ志賀の里寺に葬ゆ忘ゝ後文孫
四年久遠元豊文太切と不和とゝ世た
まひゝ野ゝよ切振まゝ内思ゝの面ゝ死出
の清俊ゝ結ふまつゝんと座と組ゝふ泊〳〵ふ
話あ〳〵ば行〳〵振よゝ中せとのゝ上ゝ言ゝ
黙ゝ百俊ゝ出ゝ詞ゝ仕せ事ゝんとゝ
ゝくのゝ〳〵ゝ上〳〵今ゝ〳〵黙ゝ吳の出服

くゝ面せし、夏のかゝまし、涙よむせびける殿下
も袖ぬらしとゞめ給ふ百姫はは先立給ふんと
鎧刀をたの編毫ぬ寵ぬ
詩歌ぬ折るばくちよるぐくく
のこゝろも法ゝ紀あぐしうさ名残
と遺もおきしくふ急撥切くく死を初めとす
用捨捨ゝ俄ゝ極例ゝ暴ゝ居ゝるぐ餘ゝ法ゝく
双眼ぬ育ゝるゝ命下ゝまゝぶちゝゝるく入
乱しゝく存命下百姫ぐ詩吊ひる祖師ゝゝで
武張人ゝを語ゝるく世ふゝりゝ